

<修正案> 淀川部会(5/15)資料2-2に関して.

46

22P. 「2)水質」の前に「2)水温」を挿入.

## 2)水温

淀川本来の生物・生態系の多様性の回復を図るためには見逃がし勝ちなことではあるが、河川生物の生存条件の第一は水温の適正化を図ることである。水中生物は体温調節機能をもたぬ変温生物で、水温の影響を直接受けるため適水温を求めて常に遊泳・移動を欠かさない。厳寒期にも2~4℃を、灼熱の盛夏(気温40℃を越えても)でも20~25℃以下の水温に止まることが生育・繁殖を継続できる条件で、それが餌生物や魚介類の共生を保證することになる。こうした「2~5℃」~「20~25℃」前後の範囲で最適水温帯を求めて、水底深く潜んだり、逆流・流下・回避したり、死滅する前に産卵して種の再生を図る。特に表層水域を生育域とする魚はそうした最適水温域を求め、遊泳行動を強く求める。

水の蒸発や、水際の植生による熱の放散も、水温の上昇を抑制し、川の浅瀬も水流の表面積を拡げて夏期の熱の放散を促し、逆に冬期は太陽熱の吸収を助けて笑れるので、川には瀬や水際植生が河川生物の生存可能な水温維持に欠かせない。河川生物の適水温生態は、何万年単位の自然史の中で馴化・形成されてきたもので、河川生物の生存適応習性を乱す水温変化は、彼等の生存を危くすることになる。